

未来へつなぐ川 ― 問われる文化の創造と継承
日本とアフリカ, 自然に育まれる同時代の生命力

日本ナイル・エチオピア学会第14回学術大会は、2005年4月16日(土)、17日(日)の両日、千曲市の戸倉創造館で開催されました。16日には、以下のようなプログラムで公開講演会が開かれました(共催:千曲市教育委員会, 後援:千曲市・さらしなの里友の会)。

本号では、これらの講演・対談記録を載録いたします。講演の多くはスライドを使用したもので、本号の記録のみでは若干わかりにくい箇所もありますが、場の臨場感を伝えることを優先し、口語的表現についてもあえて最小限の修正にとどめました。

◆プログラム◆

日時: 2005年4月16日 13:30~18:00

場所: 戸倉創造館・大ホール

総司会: 真道洋子(中近東文化センター)

開会式挨拶: 福井勝義(会長) 宮坂博敏(千曲市長)

第1部 自然に遊び, 育まれる子どもの世界

自然は最高の学習塾 ― 上ナイル, スルマ系社会の<大人になること>

福井勝義(京都大学大学院人間・環境学研究科教授)

自然に育まれた少年 ― <川に落ちこぼれた>子ども時代から

河合雅雄(兵庫県立丹波の森公苑長, 京都大学名誉教授)

対談 河合雅雄×福井勝義

(司会: 松村圭一郎 京都大学大学院人間・環境学研究科助手)

第2部 千曲川とナイル ― 文化の創造と継承

ナイルがはぐくんだエジプト文明

屋形禎亮(信州大学人文学部元教授)

ナイル川をめぐる周辺地域との交流 ― カルガ・オアシス, アル・ザイヤン遺跡を例として

大城道則(駒澤大学文学部専任講師)

遺跡から見た古代千曲川の水運

川崎 保(長野県立歴史館専門主事)

第1部 自然に遊び、育まれる子どもの世界

自然は最高の学習塾

―上ナイル、スルマ系社会の〈大人になること〉―

福井 勝義

□はじめに

タイトルを「自然は最高の学習塾」ということにさせていただいたわけですが、つい最近ですね、自然科学を専門にされている方がですね、やっぱり私たちは自然の現象を観察し、問いかけることによって、現代の科学の先端があるというようなことをおっしゃっていました。なるほど、単なる小学校、中、高の学習塾ではなくて、現代の最先端の科学ですね、自然は最高の学習塾であるということが言えるかなと思ったところでございます。

□白ナイル川上流の社会

それで、今回話題提供させていただきますのは、ナイル川の上流、今の宮坂市長さんのお言葉にもございましたように白ナイル川の方の上流、それからずっと行きますと、ウガンダの方に入りますけれども、そこから東部にいったところ、スーダンとエチオピアの国境あたりのところで、私、30 数年はそこに通っているんなことを学んでまいりました。その一端を今日はスライドをごらんいただきながらお話させていただきたいと思えます。

これが北東アフリカの地図でございます。ナイル川がどのへんを流れているか、という見当をつけていただいて、ほぼ真ん中あたりが今回お話させていただく人たちの社会であるということです。これだけたくさん言語を持った人たちがこのわずか、つまりこの東西が500〜700キロくらい、南北が500キロくらいでしょうか、といったところに、ここに挙げているだけでも30 くらいの異なる

言語を使う人たちがいるわけです。異なると言ってもどのぐらいの言語かといって、近い人たちでもドイツ語と英語あたりの近さと言うのがせいぜいでございます。遠いところではまったく言語的に違う人たちがここに住んでいるわけでありませう。

ここに住んでいる人たちのほとんどは小学校教育を受けていない、文字をもたない人たちであります。ところが学校教育を受けてなくても文字をもたない子どもたちでも、非常に目を輝かせてすくすく育っていく、その誇らしさ、目の輝かしさに、私は通う度に、現地に行くたびに本当感銘を受けるんですけども、その背景って一体何なんだろう、どうして日本の子どもたちは逆に目の輝きが、大きくなるにつれて失われていくのか、といったようなところを自省しながら現地に通っております。

□単純で豊かな世界

次お願いいたします。ご覧になりますように、これは石臼をですね、石でたたきながらつくってそしてその石臼で粉を挽いて、そして近くに土器のかけらがございませう、一番右端の男の人は、石でかまどが三つあって、そして石でたたいている。5 千年前の縄文中期よりも物質文化から見るともっと単純かもしれません。そうした人たちの世界を探っていきますととても豊かな世界が広がってくるわけです。その一端をご紹介していきたいと思えます。

次お願いいたします。赤ちゃんはどこでもこうして母親に育まれて大きくなっていくわけですが

ど、よくあの地域は平均寿命は短いだろうなって言われるんですけども、短いのは5歳くらいまでの間にけっこう不幸にして亡くなっていく、それを過ぎるとかなりの人たちが長命になり、80歳前後の人も多くいらっしゃる。で、私は先ほど申し上げましたこうした子どもたちがどのように大人になっていくのか、学校教育も受けない彼らがどうやってどうして目を輝かして、誇らしい大人になっていくのか、ということこれから見ていきたいと思います。

□言葉を学ぶ

私たちの文化人類学の仕事っていうのは現地に入って言葉を学ぶことから始めるわけです。最初何もわかりません。辞書も何もない、そういうところで偶然挨拶言葉から始まっていくのですけれども、偶然だした動物図鑑に関心があってですね、動物図鑑に載ってる動物をほとんど彼らは知ってますから、ダータン、ダータンってお互いに言い合っているわけです。関心を示している。「これは何？」ということが「ダータン」ということだろうと思って、私どもはそれから言葉を幼児のように習得していくわけです。

だいたい言葉、外国語って言うと私たち英語のコンプレックスがあるのか、6年たってもほとんどしゃべれないような学び方ですけども、生活をともにするとですね、半年くらいで日常会話ができるようになって、1年くらいたつとかなり相手のしゃべってることも聞けるようになる。というあの社会の言葉っていうのは単純じゃないかということをおられるのですけれど、とんでもない。それぞれのきちとした文法、それから語彙、言葉の豊富さは決して日本語に負けないくらいの豊富な言葉がございます。

□自然から学ぶ

これは彼らの住んでる放牧キャンプですけど、牛を中心に飼っておりまして、こうしたサバンナの中に馬蹄形のような集落がある。それが彼らの放牧シンボルで、たえず東を向いている。東が生まれるところで、西は沈んでいく、いわゆるそういう自然観の中で生活しているわけです。

次お願いいたします。ここでいきなり自然観とかですね、どのように子どもは大人になっていく

のかというのを一般にご説明してもなかなかご理解いただけないと思いますので、色を使ってですね、色とか幾何模様を使って、彼らがどのように大人になっていくのかということと、さっき申し上げました上ナイルのナーリム社会というところに入ったんですけども、そのときの私に与えられたタイトルが「子どもの自然観の習得」ということで、大人の自然観というのを描き出すのも非常に難しいのに、子どもの自然観の習得ってどうやったらいいのかと思って、そこで私が長い間通ってましたエチオピア西南部のボディの社会をもとに描き出していこうと思ったわけです。

色彩というのはご存知のように色相と明度と彩度ということで客観的に数値で表すことができると同時に、太陽の色は日本と他の社会でしばしば違っております。私たちは赤とか橙とか黄色、あるいは黄色とみなすとなんかあいつおかしいな、といわれがちなんですけれども、黄色とみなしている社会もあるし、白とみなしている社会もある。といったようにモノのとらえかたが文化によって違っていることっていうのが一点なんです。

こうやって98色の色彩カード1枚1枚出して尋ねているんですけども、こういう10歳になるまでの子どもが即座に反応するわけです。それをもとにこうやって彼らに分類をしてもらう。彼らは先ほど申し上げましたようにこういう色彩カードを見たこともないし、学校教育でクレヨンなんかも使ったことがない。それにもかかわらず、丹念に分類し、そしてさきほどの1枚1枚の色彩カードとこれとが非常に整合性があるわけです。

□豊富な色模様

日本に帰って小学校の4年生、10歳の子どもにやってもらったんですけども、私は大学、いろんな大学で集中講義をするときに学生さんにもやっていただいたことがありますけど、さきほどのボディの子どもにはかなわないほどでございます。この方は非常に聡明な、きれる方だと思って300色の色彩カードを1枚1枚出して名前を聞いていく、そしてあとで300色の色彩カードを渡して、そうすると丹念に分類してくれるわけです。私だと36枚くらいだと言えらると思うんですけども、100枚とかいうともうどんな色名でいっていいのかわかんない、ましてや300色となるとですね、

もうこんがらがってしまうわけですが、この方はもう丹念に分類していて、約2時間ほどで全部仕上げた。

例えば幾何模様をやってもですね、ああいう上の点々模様がコルティ、ブチの模様がチョグリ、それをあわせるとチョグリコルティとかですね、ほとんどの幾何模様をこのように分類することができるわけです。それはこういうたくさんの牛の毛色を背景に培われたものだと思います。私たちにとっては黒い牛とか、ホルスタインのような模様の牛とかぐらいしかわからないんですけども、およそ1万年前ぐらいにですね、人間が野生の動物を家畜化した、そうするとこうやっているような模様が出てくるわけですね。それを基盤にしてかれらの認識体系が発達したということが考えられると思います。

この少年はさっき色彩カードを1枚1枚分類して名前をよんでた、その後20年後ぐらいですけども、こういうりっぱな若者といってもこのときは30いくつになっているんですけども、ごらんになりますように帽子の真ん中に黒いブチがありますね、これは何かって申しますと、こういう真ん中にブチのある牛がいるんです。これはゲッリってよんでるんですけど、それと対応しているわけですね。

次お願いいたします。これは真ん中にイヤリングですけど、真ん中にビーズの黒いブチがありますね、これとさっきの牛の模様と対応している。次お願いいたします。これは犬まで真ん中に黒いブチのある犬がいますけど、これは両端が黒ですね、これはルディなんですね。この首飾りも後ろが黒で前が黒で頭と尻が黒い模様、牛の模様を表しています。次お願いいたします。これは斑点模様、コルディですね。布も斑点模様だし、首飾りも斑点模様、鉢巻も斑点模様が見られる模様をつけております。

これはシマウマですけど、シマウマは何模様かと申しますと、私たちにとっては縦じまの模様にいわゆるさっきのトゥラの模様になると思うんですが、彼らはこれを斑点模様だというんです。これは間違いなく斑点模様だと。その背景については長くなるんですけど、こういう野生の動物、あるいは自然界のそういった色模様というのを彼らは丹念にとらえて相互のつながりを持っている

わけです。

これはその辺に転がっている様々な色模様の石片を集めてきては分類しているという、だから彼らにいきなりですね、ああいう色彩カードを見せても彼らは問題なく彼らの遊びの中で彼らの色模様の認識を習得しているので、私たちがあえてああいうカードを持ってきてやってもですね、彼らはわけもなくやれるということが、こうやって彼らの遊びを見てみるとわかるわけですね。

次お願いいたします。そういった色ですもんね八原則、八つの基本語から成り立っているのと様々な模様がですね、またこれに加わっていくわけです。私たちが不思議だなんていう模様も彼らにとってはほとんど即座に、皆さんのつけていらっしゃるいろいろなものも彼らにとっては即座に名前を言うことができるわけです。

こうして事例を通じてですね、大人になってあるいはもののとらえかたを学んでいくわけですが、それでも最後には、子どもがどのようにして自然観を習得していくかというのをあと3分くらいでご紹介していきます。これはスーダン南部ですけども、家族といっしょに行きまして、前の写真展で小さな3、4歳の子と、満1歳の子が出てきますけど、そこで延べ半年間住み込んで調査をいたしました。この子はまだ何にも文字がかけなかったんですけども、大人からいろんなものをまねして聞いているところです。

□15、6歳で大人に

ここですもんね自然観の習得といった場合にどうしたら自然観の習得を表す、いわゆる調査することができるかというので私は戸惑ったんですけど、ボディのようにここのナーリムという社会も自然界を様々な色模様を通じて習得しているわけです。そしてまず大人の人たちに基本的な色模様を聞いていくわけです。例えば太陽とか星、星って言うのは私たちには何の表現もできないですけど、斑点模様でコルディっていうわけですけど水とかそういった基本的なものを聞いていくと、だいたい6歳くらいでほぼ大人と同じくらいになる。

次お願いいたします。これは植物ですね。私たちの周りにある一般的な植物、サクラとかアズとかモモとかですね、あるいはリンゴとかさうい

ったいわゆる、栽培植物ではなく野生の植物を一般的に聞いていったんですけれども、花の色と実の色っていうのはけっこうみんな知ってるんですね。それをもとに子どもたちにまた聞いていくと5、6歳でほぼ大人と同じくらい知っているわけです。知るようになるわけです。

ところが今度は哺乳動物というか、野生にいる動物をですね、哺乳動物を聞いていきますと、もう15、6歳になってやっと大人と同じくらいになるということで、他の分野についても調査していったわけでありまして。そこではっきりわかったことは、基本的な自然観、自然のとらえかたっていうのはほぼ6歳で大人と同じようになっているわけです。ところがそこまでは子どもは何にも手伝わない。ただ遊びに任せているわけですが、6歳くらいから基本的な自然の認識とかとらえかたを学んだあたりから親の手伝いをするようになるんですね。その手伝いの過程で彼らはさらに周縁的な自然のとらえかたを習得していくということで、ほぼ15、6歳で大人と同じようになってくる。例えばこの自然観の習得というのは色模様を介して今みていただきましたけれども、ここから言えることはこうやって学校教育を受けなくても子どもたちはその社会の教育装置を通じて、あ

るいは遊びを通じて自然界からそのものにとらえかたを学んでいる。そして15、6歳になってほぼ大人と同じような付き合い方ができるようになるんですね。

例えば私たちの社会で、日本の社会で、紅白と黒と白との色の組み合わせを間違えたらですね、その人はそういう社会では付き合い合っていけない。私たちが大人になる最も基本は、大人とおなじようなものにとらえかたができるということが大きな基本ではないかと思っているわけです。

これは日本の縄文の中期の遺跡とほぼ同じ5千年前の岩壁画なんです。これはサハラのカッシルの岩壁画で現れている牛の様々な模様をここで出しております。左側に人がいますけれども、この図からわかりますように彼らは5千年前に明らかに野生の動物を家畜化していたと、そして非常に彼らは多様な色模様に関心を払っていた、ということはどういうことかと申しますと、先ほどのボディヤナーリムの社会のように多様な色模様を認識しとらえていくことですね、彼らの豊かな世界が広がっていったということがいえるかと思えます。

どうもご静聴ありがとうございました。

(ふくい・かつよし/日本ナイル・エチオピア
学会前会長・京都大学元教授)